

動画をスキャンください。



Lecture 3



PLES講義 第二言語習得理論(3): 行動主義の衰退と認知主義の台頭

田中茂範

PEN言語教育サービス代表

慶應義塾大学名誉教授

オーディオリンガル・メソッドに対する反論

W. Rivers. "The Psychologist and the Foreign-Language Teacher". University of Chicago Press, 1964.



1. 生徒はドリルの中で機械的な反応をしているだけで、本当の意味での有意義な学習は起こっていない。
2. 習慣形成のための機械的な反復は単調で退屈である。
3. 文法の説明抜きで文法パターンを指導するというのは時間がかかり、学習者を苛立たせる。
4. そもそも習慣形成理論は言語学習のありようを説明する理論ではない。

Notes

外国語教育の流れ

Audiolingual から Communicative に

Wilga Riversの著作

"The Psychologist and the Foreign-Language Teacher". University of Chicago Press, 1964.

"Teaching Foreign-Language Skills". University of Chicago Press, 1968 & 1981.

"A Practical Guide to the Teaching of English as a Second or Foreign Language". Oxford University Press, 1978.

"Communicating Naturally in a Second Language". Cambridge University Press, 1983.

"Interactive Language Teaching". Cambridge University Press, 1987.

Notes

--

Chomsky's Review of B.F. Skinner's Verbal Behavior

批判1: Verbal Behaviorは、検証されていない仮説でありその主張は信頼性を欠く。

批判2: スキーナーの理論概念はこれまでの伝統的な言語行動の記述方法のパラフレーズでしかない。(reinforcement は probability のパラフレーズ)

批判3: 発話はきわめて複雑かつ創造的な行動であり、外部刺激と反応ではなく、人間の内部構造を捉える遺伝学的、脳神経学的説明が必要である。

印象: 今、振り返れば、一方的で反論を許さないほど強引な批判だが、時代の流れはチョムスキーの認知論的なパラダイムを熱狂的に支持した。

Language, 35, No. 1 (1959), 26-58.



Notes

--

チョムスキーによる批判の文体

Careful study of this book (and of the research on which it draws) reveals, however, that these astonishing claims are far from justified. It indicates, furthermore, that the insights that have been achieved in the laboratories of the reinforcement theorist, though quite genuine, can be applied to complex human behavior only in the most gross and superficial way, and that speculative attempts to discuss linguistic behavior in these terms alone omit from consideration factors of fundamental importance that are, no doubt, amenable to scientific study.... (Chomsky, 1959, 27-28)

Notes



Noam Chomskyの見解

「言語学習は、強化と連想と一般化によって学習される習慣形成である」→
チョムスキーは真正面から批判

言語行動は刺激に対する反応ではなく、創造的である。
話すときは、創造的に文を作り出しているのであり、模倣したりそこからの類推をしているのではない。

Notes



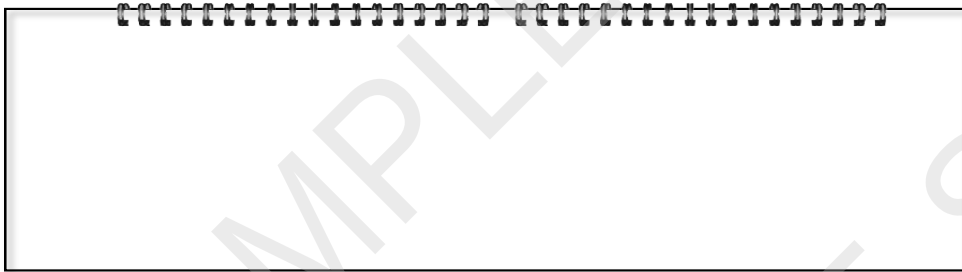
文法能力

文法を学ぶということは、言語の構造パターンの集合を類推や強化によって学ぶことではなく、無限の数の文法文を生成することが可能となる有限の規則を学ぶことである。

grammar = a finite set of rules that generate an infinite number of grammatical sentences

言語表現の集合 vs. 無限の文を生成する能力

Notes



The logical problem of language acquisition: Learnability

前提：言語を学んだ人は、無限の文法文を生成することができる、有限個の規則の体系を習得した人である

1. 言語使用は創造的であり、それは人間の言語が著しく複雑であることを示す。
2. 子供たちが接する言語は文法的な文だけではなく、言い間違い、不完全な表現、言い淀みなどを含んでいる。(poverty of stimulus)
3. 子供は、入手可能な有限の言語データから、インプットの限界を超えて、無数の新しい文を自由に操れる能力を獲得することができる。

Notes



4. 育つ環境や知能の個人差があるにもかかわらず、子供たちは、なんら特別の困難や努力もせずに、この極めて複雑な言語の規則体系を5歳ぐらいまでに同じように身につけることができる。

結論

5. この言語習得の速度と類似性を説明するには、人は生まれながらにして遺伝的に言語を習得する生得的な能力が備わっていると仮定するしかない。

Notes

言語習得の生得説

生得的な能力: LAD (Language Acquisition Device); UG (Universal Grammar)

言語のインプットが与えられれば、UGが作動し、個別言語が創発する

入力 UG → LAD → 個別言語

cf. the innateness hypothesis vs. the tabular rasa hypothesis

Notes

臨界期(critical period)

Eric Lenneberg The Critical Period Hypothesis (1967: Biological Foundations of Language, New York : Wiley and Sons.)

自然な言語習得には時限がある
思春期までに母語のインプットに触れなければ言語習得は
できなくなる

生得説の論拠を与える

現在は、生得説も疑問視され、それに代わる
The Computational Model(e.g., The
Competition Model, The Connectionist
Model)が有力視されている。
Anne S. Hsu and Nick Chater
The Logical Problem of Language
Acquisition: A Probabilistic Perspective.
Cognitive Science, 34, 972-1016.

Notes

行動主義的言語習得観の衰退

模倣と練習によって言語を学ぶという考え方に対して、
認知的なとらえ方が台頭してくる
しかし、第二言語習得においても生得説は有効か？
「臨界期」と第二言語習得
「臨界期仮説は第二言語には適用されない」
(Lenneberg)

敏感期:sensitive period

「臨界期を過ぎるとnative-like competence の完全な習得は無理」(Long, 2005)
「年齢は重要な変数だが、良質のインプットは臨界期の壁を超える」(Slabakova, 2016)

Notes

行動主義モデルと認知主義モデル

WHAT COMES IN GOES OUT

入力 → **BLACK BOX** → 出力

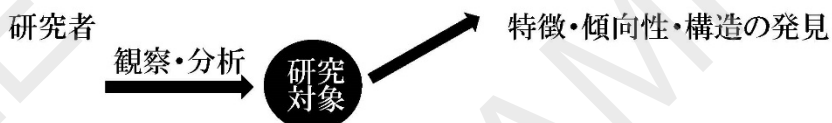
GOING BEYOND WHAT IS GIVEN

入力 → **INFORMATION PROCESSING** → 出力(mental representation)=仮説

Notes

行動主義と認知主義の研究法の違い

行動主義的研究スタンス

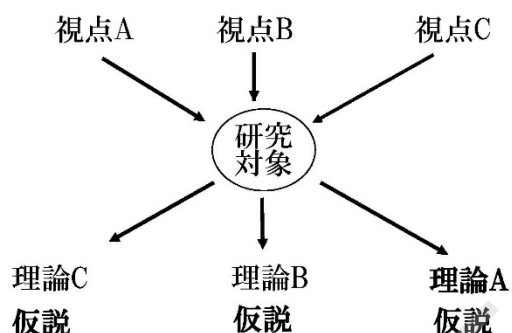


認知的研究スタンス



Notes

構成主義



Notes

A rectangular box representing a spiral-bound notebook, intended for taking notes. It has a horizontal line near the top and a spiral binding on the left side.

SLAにおける構成主義

Creative Construction Hypothesis (H. Dulay & M. Burt)

1. 学習者の母語の影響は大きくない
2. 第一言語習得と第二言語習得に質的な大差はない
3. 言語習得は、言語インプットから創造的に仮説を構成すること (creative construction) によって行われる。i.e. Every learner constantly creates hypotheses about the patterns of the language which s/he is learning.

Notes

A rectangular box representing a spiral-bound notebook, intended for taking notes. It has a horizontal line near the top and a spiral binding on the left side.

Fin

行動主義の理論的根拠としての衰退化に伴い、認知的なスタンスが強くなり、その結果として

第二言語学習者も与えられたものを受けるという受動的な存在ではなく、与えられたものに働きかけ、仮説を立て、それを検証する積極的な存在であるという学習者観にシフトする。

Notes

